

明快！  
国旗・国歌の基礎知識  
日本の国旗と国歌

【国旗国歌法】

日本の国旗は「日章旗」(日の丸)、国歌は「君が代」である。1999年(平成11年)に国旗国歌法が成立し、長年の慣習が法律に明文化された。

国旗とは、特定の国を他の国と区別するしるしであるとともに、その国の主権をあらわす神聖なシンボルとして尊重されるものである。

国歌も、自国の独立性と国がらをあらわし、また国内の結束をうながす歌で、国際的な行事や国内の儀式などに、敬意をもって歌われる。

わが国の日の丸・君が代は、それぞれ古い由来をもつ。それはどんなものだろうか。

【日の丸の由来】

日本人は古くから、太陽をうやまう気持ちをもち続けてきた。それは、太陽が命と暮らしを保つために欠かせない、光や熱を与えてくれるからだ。

日本の神話では、大和朝廷の祖先の神として最も重要視されるのが、太陽神としてもあがれる天照大神である。

遣隋使が持参した外交文書には、わが国のことを「日出づる処」(太陽がのぼる場所)と表現している。やがて、国の名そのものが、太陽にちなむ「日本」と定められた。これは、律令国家の制度が整えられた7世紀後半のころであろう。

平安時代には、太陽をかたどった金の日の丸をあしらったものが、扇などに使われていた。中世から近世初頭にかけて、白地に赤の日の丸を描いた旗が、合戦などに用いられている。

江戸時代に入り、日本人の海外渡航が禁止されると、日の丸は江戸幕府専用の船印とみなされるようになる。やがて、幕末の開国以降に、日本の船を他国のものと区別する必要がでてきた。この局面で「白地、日の丸」の旗を「日本総船印」「御国総標」と定め、外交にも用いた。そこで、明治の新政府も1870年(明治3年)、改めて日の丸を「国旗」として布告した。

【君が代の由来】

「君が代」の元歌は、平安時代の前期にまとめられた『古今和歌集』に、長寿を祝う賀歌(他人に幸福がくるように祈ってよむ歌)の代表作としておさめられている。

わが君は 千代に八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで  
(私の敬愛するあなたさま、どうか千年も万年も、小石が寄り集まって大きな岩となり、それに苔が生えるほど末永くお健やかに)

これが、まもなく今の「君が代」と同じ歌詞になり(意味は同じ)、中世から近世を通じて、神社や寺院の行事で歌われたり、様々な物語や歌舞などにも取り入れられて、広く庶民に親しまれてきた。

明治に入って欧米との交流がさかんになると、日本にも国歌が必要になった。そこで古くから多くの人々に愛唱されてきた「君が代」が国歌に選ばれ、それに日本的な雅楽調の曲をつけ、洋楽風に編曲したものが1880年(明治13年)の天長節(天皇誕生日)に公表された。それが明治後半から全国の小学校で祝祭日の儀式唱歌として普及し、慣習として定着した。

国歌「君が代」の君は、日本国憲法のもとでは、日本国および日本国民統合の象徴と定められる天皇を指し、この国歌は、天皇に象徴されるわが国の末永い繁栄と平和を祈念したものと解釈されている。

天皇は象徴として、国民全体のことをいっている。国民全体が末永く健やかという意味。